

は子どもの依存行動を許す度合いや身体的接触、一しょにいる時間の多少などを調べた。子どもの「従順度」では自己主張、母親に対する反抗の度合いを、「依存度」では母親の側にいたがる度合い、特に入園当時の母親と離れる態度、身体的接触を求める度合い、親の注意をひく度合いなどを調べた。その結果、クラスの子どもは抄録表Ⅰに示す通り大体四つの型に集中した。そこでこのそれぞれの型の中で入園後四か月までの記録をもとに子どもたちの特徴と、共通点をみた結果、非常に類似していることがわかった。但し、型Ⅳは特殊な家庭なので除外し、型Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて個性を伸ばし、短所の中から好ましい面を汲みとつて表Ⅱのような目標をたてた。

次にこの目標を達成するために具体的にどのような指導をし、どのような結果を得たかを記す。

型Ⅰの子どもに対しては、子ども自身の考えがはつきりしていいことに好奇心をもっているのでこの意見を尊重し、時々ヒントを与える限り友だちとして助言するような態度をとった。時々破壊的行動があるのでクラス全体の子どもから批判させ、また、母親と同様に時として厳しい態度をとったこともある。この子どもたちはこれを受けとめるだけの素地があり、必要なことがある。この結果型Ⅰの子どもはリーダーとしての役割を果し、自主性、独創性が更に進歩したが、交友関係はあまり向上しない。

型Ⅱは自尊心が強く自意識が過剰で、他人の意見を求めず自己主張が多いので他との社会的交流は少なく適応が困難である。したがって自分の力で処理しようとする欲求を認め、自信を生かして他の子どもを助ける責任を与え、彼らの能力を承認していく。また、身体的な接觸をするように努めた結果、一学期中閉鎖的だったこの型の子どもは全員一年の終りまでには開放的な明るい態度になった。

また、十月と三月にクラスの一人ひとりの子どもに全員の名前を言つて好むか嫌いか問い合わせオメトリックテストをしたが、以上のこととは十月に友だちを好む度合いの少なかった型Ⅱの子どもが三月にはクラスの大部分の子どもを受容れる態度に変つてることによつても示されている。

型Ⅲの子どもは非常に依存心が強いので一学期の間はあまり手をかけないようにしていたが、なかなか適応しなかつたのでこの子どもたちの母親のように身体的接觸を多くし、寛容にしてみた結果、次第に友だち関係もよくなってきた。

このような方法で個々の児童に接し、型ⅠおよびⅢには親と似た態度をとり、型Ⅱは徐々に自立に向けるべく変えていくこと、型Ⅳには親と反対の態度をとるようにすることができるよう目標に近づく手段であることがわかった。

II 言語および知的側面の指導に関する研究

幼稚園の言語指導に

関する実態調査

(話し合い・あいさつ)

埼玉大学 墓間 郁夫

東京・魚籃幼稚園 山田巖雄

国立国語研究所 村石昭三

東京学芸大学付属幼稚園 高杉自子

本調査は文部省教材等調査研究会の幼稚園小委員会(言語班)が、小委員を挙げて各都道府県において都市、農村、設立者別等を考慮して選んだ数園宛につき質問紙によって言語指導の実態を調査したものである。(調査園数一三一、国立一七公立六四私立五〇)

一、幼児間の話題(大会発表論文抄録24頁第2表参照)

○社会の出来事(スポーツなどの社会に関する話題)——五才児ではその総話題の二四・三%で最高、四才児では二位の一六%、三才児では七位で四・二%で年令の進むに従って社会に対する関心が高まる。ことに三才と四才との間に著しい差が見られる。

○テレビ、ラジオで視聴したこと——五才児では全話題中二一・七%で二位、四才児で一八・二%で最高、三才児は一三・三%で三位といずれも高い率を示し、幼児を通じて最高であり、テレビの方が圧倒的に多い。

○テレビの、幼児の言語生活への大きな影響力を考え、これに対する正しい受けとり方の指導が幼児期から必要であろう。

○家庭に関する話題(家庭のできごと、家族のこと、来客のことなど)

○五才児で九・三%の三位、四才児で一四・七%の三位、三才児で一四%の二位であるがことに五才児の%は少ない。

○自己に関する話題(たべもののこと、どこかへ行ったり、何か買ったものらったことなど)——五才児で六・七%の六位、四才児で一三・二%の四位、三才児で七・二%の最高を示し、年令の進むにつれて著しく減する。

三才児では自己および家庭に関する話題が四一・二%を占め、五才児では社会およびテレビ、ラジオ視聴によるものの合計が四六%であることは対照的である。幼児の話し合いを活潑にするためにはこの興味ある話題をとらえることが指導上、必要である。

二、幼児が教師に話す話題(大会発表論文抄録24頁第2表参照)

○自己に関すること——五才児は二〇・五%、四才児が三三・三%で各年令とも最高の率である。

○家庭に関すること——五才児で一四%(三位)、四才児一四・九%、三才児一九・七%で同じく二位を占める。

○自己および家庭に関するものの合計は五才児三四・五%、四才児四八・二%、三才児五九%となり、幼児は教師に対し、いかに自分を多く語るかが分る。ここに幼児の話すこと、きくことの指導における教師の重要な役割が示唆され、また、情緒の安定についての教師の態度が重要な問題となる。

三、話し合いが活潑に行なわれる場面

各年令を通じ自由な遊びの場が最高で平均四五%、昼食時が二八%、登下園時が一七%で、これらの場面を捉えての言語指導が必要である。

(六三%)が話し合いを効果的にする方法としては教師の發問、助言、などの指導技術や話題の選択などが挙げられている。(六九%)

五、自発的にするあいさつ（大会発表論文抄録25頁第5表参照）

六、絵本による話し合い指導について

話し合うための絵本を見せる方法については、年令による差はあまり見られなかった。また絵の中の文章をどのように扱っているかについて見ると、「話し合の前によんできかせる」というのが、各年令を通じて最も多いが、三才、四才、五才の順に、わずかの差であるが、少しづつ少なくなっていて、話し合った後によんでも聞かせることは、三才児と五才児では、かなりの差で五才児が多くなっている。

「絵本をつかって、話し合いをどのように扱っていますか。」では、三才児では、教師が先きに發問して話し合う場合が多く、こともの発言から話題を見つけることは少なくない。五才児になると、こともの発言から話題を見つけることが、三才、四才に比べて多くなっていることがうかがえる。

話題がそれた時の指導では三才児ではそのまま話させていることが多い、話題をもとに戻すことは、五才児になると四四%を示していく、三才、四才に比べて最も多くなってきている。

三才児は全体的にみて絵本に書いてある事物について話し合うことが最も多い。それが五才児になると事物について、内容について、感じたり考えたことなどについて話し合う率がそれっぽほ同じような割り合いを示していて、年令による差異が見られる。

（大会発表論文抄録23—27頁）

三年保育児と二年保育児の 保育材に対する適応の変化

（第二報—言語関係）

神田 寺幼稚園

森崎君枝

阿部明子

佐藤道子

米内みさ

井山不二子

小坂美保子

松村美佐子

保育の効果をより適切に高めるために、幼稚園での言語に関する子ども達の成長ぶりを各月ごとにわかつて整理してみた。

新入園児として過す一年間でも三才と四才では集団生活に適応してゆく過程が、時期的なずれは勿論、質的にも随分違った点が多いことが注目される。

三才では、まだ他の意識が少ないことから個々への働きかけをしないと行動に移せない傾向が暫く続き、次に、ごく身近かなものへ関心が発展、七月になって、おとなの話しかけも大分理解できるようになるが、知識的な考察が必ず伴うとは言えない段階。九月から十二月へかけて自分なりに理由づけようとする力と、自己中心の考え方なり行動から移行しつつある時期を経て、三学期には、質問に理由づけも含まれてその数も多くなる。しかし教師への話しかけが大部分である。

四才児は一応他を意識し、知的な発達からいつても全体への話しかけを理解し、自分が納得するまで質問する。観察物にさわって見ないと承知できない。自分が知っていたり経験することに結びつけ